

| | |
|---|---|
| 氏名 | 深堀彩香 |
| 学位の種類 | 博士（音楽） |
| 学位記番号 | 博音第9号 |
| 学位授与年月日 | 平成28年3月25日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当者 |
| 題目 | 音楽面からみるイエズス会の東洋宣教 —16世紀半ばから17世紀初期におけるゴア、日本、マカオを対象として— |
| 学位論文等 審査委員 | （論文審査主査教授 井上さつき 及び最終副査教授 増山賢治 試験）副査教授 松本総一郎 外部 審査員 名誉教授 金澤正剛（国際基督教大学名誉教授） |
| 学位論文の要旨 | |
| <p>16世紀のカトリック教会において、対抗宗教改革を牽引する新たな修道会として1540年にイエズス会が誕生した。ヨーロッパが大航海時代の只中にあったこの当時、インド航路を開拓していたポルトガルからの支援を受けることになったイエズス会は、創立と同時に東洋へキリスト教の教えを伝え広めるために動き始めた。イエズス会の東洋宣教は、1542年に当時ポルトガル領であったインドのゴアから始められ、徐々にその活動範囲を東へと拡大させていき、1549年には極東に位置する日本に到達した。</p> <p>キリスト教は音楽を重視する宗教であるため、その音楽は、イエズス会の宣教活動を通して、キリスト教の教理と共に東洋にもたらされた。宣教と並んで教育事業にも力を注いでいたイエズス会は、東洋の宣教地にも現地の青少年を対象とした教育機関を設立し、そこで音楽も教えていた。音楽教育を受けた学生たちは、キリスト教の諸儀式で歌や楽器の演奏を担当し、イエズス会が宣教地で行っていた音楽活動に貢献していた。</p> <p>イエズス会が東洋で行っていた音楽活動に着目した研究は、西洋音楽の受容、東西文化の交流・融合、音楽教育といった観点からこれまでに数多くなされてきた。しかし、大抵の場合、それらの研究はひとつの宣教地に特化し、特定の宣教地で行われた音楽活動の実態を解明することに主眼を置いている。すなわち、宣教活動の一環として音楽が用いられていたにもかかわらず、音楽面にしか目が向けられていないため、このような根本的構図が見過ごされてきた。</p> <p>本論文では、イエズス会が宣教地で行った音楽活動を彼らの宣教手段のひとつとして捉え直し、音楽学的アプローチから東洋宣教をめぐるイエズス会の内状を明らかにすることを目的とする。そのために、16世紀半ばから17世紀初期までの約1世紀を考察の対象とし、東洋宣教の具体的事例として、東洋宣教の中核であったゴア、東洋の中でも特に極東地域の拠点として築かれたマカオ、そして、イエズス会にとって重要な宣教地であった日本の3ヶ所を取り上げる。それぞれの地域の宣教活動で演奏された音楽の実態を、宣教地での現象として捉えるというところに止めず、そこにイエズス会本部からの視点を加</p> | |

え、「イエズス会の東洋宣教」という大きな枠組みの中に置くことによって、カトリック教会からの影響にも目を向けながら、複眼的に捉えていく。

本論文は、全2部6章から構成されている。全2章からなる第1部では、東洋での活動内容を考察するにあたり、イエズス会の活動と発展について、当時のヨーロッパ、とりわけイエズス会の本部が置かれたローマを中心として、動乱期にあった当時のカトリック教会の情勢とその影響を考慮しながら広く考察した。

第1章では、イエズス会とカトリック教会の主従関係について論じた。第1節では、イエズス会創立の経緯を概観し、イエズス会が修道会としての認可を求めて1539年に教皇に提出した『基本精神綱要』について考察した。その結果、『基本精神綱要』の中で、「人々の魂の救済」という使徒的精神をイエズス会の理念とすることを表明し、さらに教皇への従順と聖座への忠誠を誓ったことにより、イエズス会が当時の対抗宗教改革を牽引する存在となったことが明らかになった。このことを踏まえ、第2節では、改革期のカトリック教会に求められた精神と、それとは無縁のところから生じたイエズス会の基本精神が合致し、それが両者の勢力拡大に繋がったことを示した。それと同時に、イエズス会の活動目的は、カトリック教会の刷新ではなく、人々の魂の救済にあったことを改めて指摘した。第3節では、イエズス会の重要な事業である宣教活動と教育活動について概観し、その充実した活動内容によってイエズス会が短期間のうちに発展し、当時のヨーロッパで勢力を強めていったことを述べた。

第2章では、カトリック教会において聖務（宗教的儀式）の際に演奏される音楽について、16世紀を中心に論じた。第1節では、教会の刷新を進める動きが強まる中で開かれたトリエント公会議（1545-1563）に着目し、そこでなされた音楽に関する議論の内容と、公会議前後の音楽の使用法の推移を示すことによって、カトリック教会での音楽の使用法がトリエント公会議を通して大きく変化したことを指摘した。また、公会議を通して、カトリック教会が根本に立ち返って、音楽に簡素さと神聖さを求める姿勢を示したことを述べた。第2節では、同時期のイエズス会における音楽の使用法について、トリエント公会議以前のイエズス会の方針と、公会議以降の変化を考察した。その結果、当時のカトリック教会では音楽の使用が最小限に留められていた中で、イエズス会が自身の活動においてキリスト教化に役立つと判断される場合に限って音楽の使用を認め、使徒的活動のために常に現実的な手段を講じていたことが明らかとなった。

第2部からは、イエズス会の東洋宣教の中で演奏された音楽について論じた。本論文で取り上げる3ヶ所の宣教地を、イエズス会の東洋宣教の足跡を辿るように、第3章ではゴア、第4章では日本、第5章ではマカオに焦点をあて、各宣教地でのイエズス会による音楽活動の実態を明らかにした。各章では、第1節において、それぞれの宣教地の当時の環境や政情にも触れながら、イエズス会の宣教活動について概観した。第2節では、イエズス会が各宣教地に設立した教育機関に着目し、東洋ではヨーロッパのイエズス会学院における教育体制を模範としていたことを示し、音楽に関してもヨーロッパに比肩するほど水準の高い教育が施されていたことを明らかにした。第3節では、聖務で演奏される音楽の使用法について、当時宣教地で執り行われた聖務の実施状況に関する記録や、音楽の使用法をめぐる議論内容や規定等の文書を用いてその変遷を追った。

第6章ではここまでの考察結果を用い、比較を試みた。第1節では、東洋の3ヶ所の宣教地における活動の実態を相互に比較し、それによって東洋では音楽が宣教に有効な手段として多用されていたことが示され、当時のヨーロッパよりも音楽活動が活発であったことが分かった。また、それらの音楽活動はヨーロッパの方式を理想としていたにもかかわらず、東洋では非キリスト教的要素や当時禁止されていた音楽を導入するという逸脱行為を頻繁に行い、それによって東西の文化的、宗教的差異を埋め、人々のキリスト教化を図っていたことが明らかになった。第2節では、東洋宣教での音楽活動に関するイエズス会の証争の実態を明示するために、東洋宣教の実情とイエズス会の基本方針とを照合した。その結果、イエズス会本部と東洋の宣教地が、イエズス会の活動理念である「使徒的精神」を大きな拠り所として歩み寄りながら活動を進めていたことが分かった。それに加えて、音楽の使用法をめぐる議論がイエズス会内部で繰り返された背景には、カトリック教会からの影響があったことが浮き彫りとなった。

以上のように、本論文を通してイエズス会の東洋宣教を音楽学的アプローチから複眼的かつ多層的に考察したことにより、イエズス会本部と東洋の宣教地の間にみられる内部の連携、およびイエズス会と当時のカトリック教会の趨勢との結びつきを明らかにすることができた。また、イエズス会の東洋宣教において、音楽という要素だけをとって見ても、そこには多種多様な要素が影響していたことが明らかとなり、東洋宣教の複雑な様相が浮かび上がってきた。

論文審査結果の要旨

深堀彩香氏の学位論文は、16世紀半ばから17世紀前半の約1世紀にわたるイエズス会の、音楽活動を宣教手段とした東洋宣教を、ゴア、日本、マカオを対象として、音楽面から比較研究したものである。研究テーマは、自身の卒論、修論の研究成果を踏まえて設定されたもので、本人の思考の深まりが結実した論文となった。

従来イエズス会の東洋宣教活動に関しては、ひとつの地域のみ限定して詳細に研究するのが常とされてきたが、異なる地域の活動を比較するというきわめて独特な発想により、興味深い比較論を展開することが可能となった。その結果、宣教師たちがそれぞれの地域の背景や慣習を充分わきまえた上で活動に当たったこと、また、それによる宣教手段の方法や活動の態度などにも違いが見られることが判明した。さらに、ローマ・カトリック教会がイエズス会に与えた影響、そして各宣教地間における情報の交換・伝達が、相互の活動に影響を及ぼしていたこと等も明らかにされた。

従来イエズス会の日本における宣教活動に関しては多くのすぐれた研究が行われてきたが、ゴアやマカオに関しては十分な研究がされてきたとは言い難く、特にマカオに関しては資料も少なく、研究を進めるのには困難があったはずである。それにもかかわらず、深堀氏は文献研究を主体に、一次資料と二次資料を適切に使い分けて、得られた情報を冷徹に分析することにより、3つの異なる地域の違いを明白にまとめ上げ、説得力のある結論を導き出した。

構成は非常に簡潔で、記述は分かりやすく、付録も充実しており、学位論文によく見られる無味乾燥な報告書とは対照的に、読み手が興味を持って読み進むことのできる内容で

ある点も高く評価された。学会のみならず、広く一般の人々にも紹介する価値のある論文である。なお、論文の出版に際しては、中国の古文献の書誌情報を付加することが望ましい。

本論文の研究テーマ「イエズス会の東洋宣教」はさらなる発展の可能性を秘めている。たとえば、今後、台湾、フィリピン、マラッカなどの地域へと研究を展開することにより、さらに充実した新しい様相が提示されよう。

以上のことから、本論文を博士の学位に値すると判断する。

最 終 試 験 結 果 の 要 旨

この最終試験では、深堀氏の学位申請論文の評価について確認を行った。深堀氏の論文は「宣教地間の比較」というきわめて独特な発想に基づき、一次資料・二次資料を適切に使い分けて得られた知見に基づく、実証的で説得力に富むすぐれた研究である。

今後、深堀氏が音楽学者として、社会に大きく貢献できる人材であることを確認して最終試験を終え、審査員全員一致で成績優秀であることを認め、合格と判定した。